

高校生の進路決定プロセスへの質的アプローチ PAC分析・TEAの併用による生徒の内面探索を通して

著者	水上 弓枝, 小嶋 秀樹
雑誌名	教育情報学研究
巻	19
ページ	27-42
発行年	2020-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00131883

高校生の進路決定プロセスへの質的アプローチ —PAC 分析・TEA の併用による生徒の内面探索を通して—

水上 弓枝*, 小嶋 秀樹*

*東北大学大学院教育学研究科

要旨：PAC (Personal Attitude Construct：個人別態度構造) 分析と TEA (Trajectory Equifinality Approach：複線経路・等至性アプローチ) を併用し、高校生の進路決定プロセスの分析、考察を行った。PAC 分析と TEA を併用する目的は、協力者の内面を“縦穴”と“横穴”を掘るように探索することによって、高校生の経験世界に丁寧にアプローチすることである。PAC 分析により高校生の内面から導き出された「連想項目・クラスター」(縦穴) をもとに、調査対象者と調査者の対話を通して「連想項目のつながり」(横穴) を時系列で明らかにしていった。その結果、調査対象者の進路決定プロセスに存在する5つのストーリーラインを生成した。また、高校生がいくつもの選択可能性を手放しながら自分の進路を切り拓いていく過程、その過程で生じる様々な葛藤、進路決定プロセスに影響を及ぼす重要な他者の存在が浮かび上がってきた。

キーワード：高校生、進路決定プロセス、PAC 分析、TEA、生成的インタビュー

1 背景と目的

高校生という時期は青年前期に位置し、活発な精神活動と運動性に優れ、人間的にも大きく成長する時期である。一方で、この時期特有の悩みや心の揺れ、不安といった発達課題を抱える時期でもある。人間関係は、家族を中心としたものから友人を中心としたものへと変化し、友人との関係は自己形成、人間観や価値観の形成、社会的スキルの習得等において重要な意味をもつ。ほとんどの中学生が高校へ進学する現在では、高校を選択する段階で、ある程度の初期的な人生選択を迫られる。高校は卒業後に「進学か就職か」という大きな人生選択の時であり、この選択には、自分の適性認識、人生設計と価値観、社会の中での自己存在のあり方などが背景となる。そのため、高校生の悩みや心配事は他の時期に比べ、勉強や進学、就職といったことに、より多く集中する傾向がある。

活発な精神活動や心の揺れを抱えている状況に反して、高校生の進路決定プロセスへはアンケート形式による数量的アプローチや生徒自身が記述した報告書形式によるデータ収集が多いという現

状がある。自己を形成する重要な時期にいる高校生が進路決定プロセスにおいてどのようなことに悩み、どのように乗り越えているのか。個々の生徒の主観的世界に寄り添い、進路決定プロセスを聴き取りたい。そのためには、生徒自身が自己の内面で起こっていることを捉え、その状況を語る必要がある。

そこで、本研究では高校生の進路決定プロセスに PAC (Personal Attitude Construct：個人別態度構造) 分析と TEA (Trajectory Equifinality Approach：複線経路・等至性アプローチ) を用いることを試みた。個人の態度構造の分析を通して個人の内面にアプローチし、場合によっては対象者自身が思いもしない気づきがもたらされる可能性をもつ PAC 分析。協力者が歩んできた経験を時間経過のなかで辿ることを通して、その人自身の選択や意思決定、それに関わる人や事柄を客体化して捉えることを可能にする TEA。両者の特長を相互補完的に使い、進路決定プロセスにおける高校生の迷いや不安、葛藤、成長を捉えることを目的として本研究に取り組んだ。

2 研究の方法

2.1 PAC 分析とは

PAC (Personal Attitude Construct：個人別態度構造) 分析は、「個」の特殊性、「個」に内在する豊穡を分析する技法として開発された(内藤, 2002)。当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度によるクラスター分析、クラスター構造のイメージや解釈の報告、総合的解釈を通じて、当該テーマに関する個人ごとの態度やイメージの構造を分析する方法である。無意識や潜在意識の範囲までもを含めて、協力者に内在する経験的意味を抽出する可能性をもつ。また、平均値も標準偏差もないが多変量解析に基づくクラスター分析を援用するという特徴がある。

PAC 分析は以下のような手順を踏む。

- (1) 協力者に調査者が連想刺激文を提示する。
- (2) 協力者が連想刺激文から思いつく単語や文章を、1つにつき1枚のカードに記入する。
- (3) 協力者がカードを重要な順に並べる。
- (4) 協力者がすべてのカードのペアについて、カードに記入した項目の直観的なイメージ上の距離を7段階(「非常に近い：1」から「非常に遠い：7」)で評価する。
- (5) 調査者が(4)で得られた距離によるクラスター分析(ウォード法)を行い、デンドログラム(樹状図)を描く。
- (6) (5)のデンドログラムを共同で参照しながら、調査者が協力者に対してインタビューを行う。
- (7) 協力者がカードに記入した項目のイメージをポジティブに捉えている(+), ネガティブに捉えている(-), どちらともいえない(0)で答える。
- (8) 調査者が協力者に対して総合的解釈を行う。

2.2 TEA による個の理解とは

TEA (Trajectory Equifinality Approach：複線経路・等至性アプローチ) は、時間経過とともにある人間の文化化の過程を記述する手法である(サトウタツヤら, 2006)。ある行動や選択を焦点化した「等至点」に関し、そこに至り、その後も持続する非可逆的時間とともにある個人の“ありよう”を描き出し、分析する。

TEA の中核が、個人の経験の変容プロセスを

記述する TEM (Trajectory Equifinality Modeling：複線経路・等至性モデリング) である。TEM には変容プロセスを明確に記述するための概念がある。TEM で用いられる諸概念(表1)は、経時的な現象をより丁寧に理解するための道具であり、現象を捉える焦点のあて方によって、必要な概念を必要なだけ用いるものである。ただし、非可逆的時間(Irreversible Time)、分岐点(Bifurcation Point：BFP)、等至点(Equifinality Point：EFP)、経路(Trajectory)という4つの概念は、TEM の特徴を明確にする上で欠かすことのできないものとされている。また、「社会的方向づけ(個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす力)」と「社会的ガイド(等至点に向かう“ありよう”を促したり助けたりする力)」は、等至点に至る個人の“ありよう”を象徴的にあらわす。人の営みは連続的であり、一見突発的に起こっている現象にもそこへ至る原因とそれがもたらす結果が存在する。そのような因果の全体的な連なりを描き出したものが TEM 図である。個人の生きてきた時間を TEM 図で描くことにより、文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意志や葛藤・迷いを含む個別多様な歩み、同じ点に至るまでに選択可能性のあった複数の経路を捉え、経験の多様性・複線性をより豊かに把握することを可能にする。

TEA は以下のような手順を踏む。

- (1) 調査者が、興味や関心、問題意識をもった事柄が実現されるポイントである〈等至点〉を設定する。
- (2) 調査者が協力者に対し、等至点に至るまでの過程についての半構造化インタビューや観察を行う。

表1 TEMに用いられる諸概念

BFP (Bifurcation Point)	分岐点
EFP (Equifinality Point)	等至点
P-EFP (Polarized Equifinality Point)	両極化した等至点
OPP (Obligatory Passage Point)	必須通過点
SD (Social Direction)	社会的方向づけ
SG (Social Guidance)	社会的ガイド
TLMG (Three Layers Model of Genesis)	発生の三層モデル
VTM (Value Transformation Moment)	価値変容点
ZOF (Zone of Finality)	目標の領域

- (3) インタビューや観察から得た内容に基づき、調査者が TEM 図を作成する。
- (4) 協力者と調査者が TEM 図を介して対話をを行い、対話をもとに調査者が TEM 図を修正する。

2.3 本研究の構想

PAC 分析、TEA の実施プロセスを図1に、PAC 分析と TEA を併用する本研究の実施プロセスを図2に示す。本研究のプロセスは、基本的には PAC 分析と TEA の手順を変えずに組み合わせたものである。本研究における目的達成のため、(1) 通常のプロセスと手順を入れ替える部分、(2) 通常にはない手続きを加える部分、(3) 通常の手続きにはあるが本研究では実施しない部分がそれぞれ1つずつある。

(1) 手順を入れ替えた部分は「 $+0$ のイメージを協力者に問う」手続きである。通常の PAC 分析ではプロセスの後半部で行われる手続きであるが、本研究ではインタビューが行われる前のプロセス前半部に移動した。これは、協力者がもっている連想項目へのイメージを調査者が認識した上でインタビューに臨むことで、イメージの共有を図り易くするためである。

(2) 通常の手続きにはない追加手続きは、「協力者が連想項目を経験した時期を記入する」手続きである。これは、PAC 分析と TEA とを円滑に接続させるための本研究独自の手続きである。

(3) 通常の手続きにはあるが本研究では実施しない手続きは、PAC 分析の「調査者から協力者への総合的解釈」である。本研究では協力者の語りを聴くことを第一の目的とするため、通常の PAC 分析で行われる調査者から協力者への「総合的解

釈」は行わないこととした。

また通常、TEM 概念を使った経験の構造化は、聴き取った内容をもとに調査者が同定していく。本研究においては、以下の2点により、協力者自身の「TEM 概念への意味づけ」を聴き取ることとした。1つは、高校生自身の〈分岐点〉〈社会的方向づけ〉〈社会的ガイド〉等の捉え方を知ることにより、協力者ならびに青年期における「人生観」の理解につながる示唆を得られる可能性がある。もう1つは、協力者と調査者の間での捉え方の違いも後々検討の余地がある。

PAC 分析と TEA の併用は、対象となる人の内面を「縦穴」と「横穴」を掘りながら探索するイメージである(図3)。最初の手順である、調査者による「等至点の設定」「連想刺激」は、内面を探索する、いわば“フィールドの設定”である。調査者から提示された「連想刺激」により協力者が自身の内面にアクセスし、導き出した「連想項目」、調査者によるクラスター分析が、いわば“縦穴”である。協力者による「類似度評定」をもとに、調査者による「クラスター分析」を経て生成されたデンドログラムのまとまりの「解釈」とともに、何がどのように関係しているのか、どこがどのように分岐点となったのか等、協力者に対する調査者の「半構造化インタビュー」を通して「連想項目」のつながりを明らかにしていく。これが、い

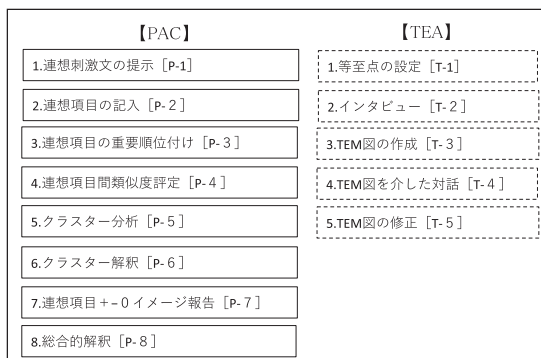


図1 PAC分析・TEA実施プロセス

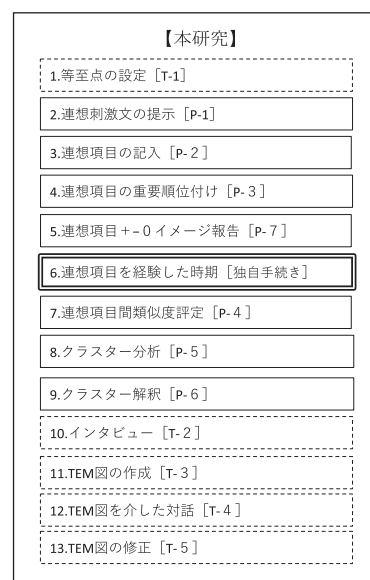


図2 本研究実施プロセス

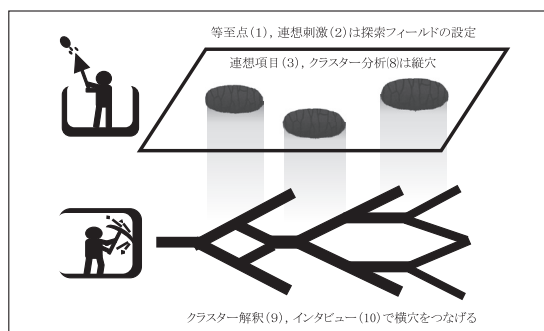


図3 内面探索イメージ

わば“横穴をつなげる”イメージである。プロセスの最後に TEM 図、つまり協力者が辿ってきた道筋を調査者が非可逆的時間軸をもつ図であらわし、それを介して協力者と調査者が対話することによって振り返りを行う。この振り返りにより、これまでの内面探索を俯瞰し、協力者の経験に対する意味づけを協力者、調査者が確認する。

2.4 先行研究を踏まえた留意点

高校生を対象に PAC 分析を実施した先行研究から、高校生への PAC 分析には一定の意義が認められている。一方で、高校生の類似度評定が最大か最小に集まる「極端な評定」になる傾向があることが今野（2016）により述べられている。通常の手続きによる類似度評定では、2枚のカードのイメージを「非常に近い」が“1”、「非常に遠い」が“7”とするリッカート尺度で評価することを協力者に求める。本研究においては、協力者が直観的なイメージで2枚のカードの距離を考え、そのイメージの通りに机の上に置き、調査者がカードとカードの間隔をメジャーで計測する方法をとることとした。また、実施時の環境からの影響に配慮し、本研究におけるデータ収集は高校生が在学する学校の一室を借りて実施することとした。

調査者から提示された連想刺激文に関して協力者が連想を行う手続きにおいて、協力者が高校生であることを考慮し、連想を助けることが必要であると思われた。そこで、協力者が連想を行う際に、連想キーワードを連想刺激文とともに提示す

る方法を実践している程（2017）の方法を踏襲することとした。

3 協力者ならびにデータ収集

3.1 協力者

協力者の在籍する高校は、複数の専門学科が設置されている公立の総合的専門高校である。高校卒業時における進路選択は、学科を問わず多くの高校生にとって人生の大きな選択の1つとなる。専門高校には、「就職か進学か」という選択を迫られる生徒も多い。就職を選んだ場合、高校卒業時からは社会人として責任ある立場となるため、それまでの学生としての生活とは大きく環境が変わる。よって、専門学科で学ぶ高校生にとって進路選択は特に大きなライフイベントといえる。

協力者は大学科^{*1}が「家庭」に属する専門学科の3年次に在籍する生徒である。当該高校がある県は66校の公立高校があり、「家庭」の専門学科が設置されている学校はそのうち4校である。本研究では、中学校卒業段階で当該専門学科を選択してきた生徒が高校でどのような進路決定プロセスを辿り、進路を決定したのかを取りあげることとした。

協力者の選定には、当該生徒が在籍する学級の担任を1年次から3年間担当している教員からの協力を得た。担任の立場から「進路決定プロセスにおいて何らかの葛藤状況を経験している生徒」を協力者選定の視点とし、1名の生徒を選定した。

3.2 データ収集

2020年3月に合計3回、1回のデータ収集につき約2時間の分析やインタビューを行った（図4）。

1日目に、PAC 分析のプロセスである調査者から協力者への連想刺激文の提示、協力者による連想項目の記入、連想項目の重要順位づけ・＋－0 イメージの報告・連想項目を経験した時期の記入、類似度評定、調査者によるクラスター分析を実施した。

協力者に以下のような連想刺激文を提示した。

「あなたは、これから進む進路をどのように決めましたか。高校3年間で振り返り、進路が決定

*1 専門学科の類型。「家庭」のほかに「農業」「工業」「商業」「水産」「看護」「福祉」などがある。

するまでのあなたの気持ちや考えたこと、また、関係したもの、こと、人について、頭に浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

連想刺激文と同時に以下のようなキーワードを協力者に提示した。

「夢、現実、希望、迷い、悩み、不安、学校、家族、先生、友人、これから、これまで、子どもの頃、中学時代、高校受験、職業、分かれ道、選択肢、自分が大切にしたいもの(こと)」

連想刺激文、キーワードとも、文章を印刷したものを協力者に見せながら、調査者が口頭で読み上げる形式で提示した。

2日目は、クラスター分析で得られたデンドログラムを、協力者、調査者で一緒に見ながらデンドログラムのまとめ(クラスター)に対する協力者の意味づけを聴いた。その際、詳細を聴き取ることではなく、イメージを聴き取することに注意を払った。さらに、内容の不明瞭な部分、補足的に聴き取っておくべきであると判断した内容を調査者から協力者へ尋ねた。協力者と調査者の対話を進め易くすること、捉え方のずれを防ぐことを目的として、1日目のPAC分析で協力者が挙げた連想項目をクラスターごと、時系列に整理した図を簡易的に調査者が作成した。図の上部には「幼児期」「小学校」「中学校」「高校1年」「高校2年」「高校3年」と時期を記した。

3日目は、2日目のデータ収集から1週間程度の期間をあけて実施。データ収集2日目から3日目の

間に、それまでのデータ収集で得た内容を時系列に配置した図を調査者が作成した。図は2日目に使用した時系列図に追加したものであり、以下の方法で作成した。

- (1) 協力者によって語られた内容を逐語記録に書き起こす。
- (2) 協力者によって語られたエピソードごとにそれを端的にあらわすラベルをつける。たとえば、『その日はちょうど、あの、就職進学ガイダンスの、あの、紙の提出日で。(中略)「泣くくらい行きたいんだったら、就職じゃなくて進学で貫き通せばいいじゃん」って(担任から)言われて。』には【就職希望に対する担任からの確認とアドバイス】のようにラベルをつける。
- (3) ラベルを時系列に配置し、それをTEM図の原型とした。

3日目は、調査者が作成したTEM図の原型を協力者と調査者で見ながら対話を行った。対話の初めに、図の作成段階で見えてきた疑問点を補足的インタビューで確認し、必要に応じて修正を加えた。3日目のデータ収集の主な内容は、TEMの概念である〈等至点〉、〈分岐点〉、〈必須通過点〉、〈社会的ガイド〉、〈社会的方向づけ〉を聴き取り、同定することである。データ収集で聴き取った内容をシートに追加し、適宜訂正を加え、まとめていった。

データ収集全体を通して、協力者には「内容の訂正・修正がいつでも可能である」ことを伝え、協力者の納得できるデータとなることを目指した。

なお、データ収集の様子は、協力者とその保護者、協力者が在籍する高校の校長から了承を得て、ビデオカメラで記録した。

4 結果

協力者に対するPAC分析の結果、16個の連想項目が得られ、連想項目間類似度評定から3つのクラスターが得られた。以下に、PAC分析で出現したクラスターおよびクラスター解釈にみる協力者の内面、TEM概念を中心にした協力者の進路決定プロセスについて述べる。クラスター名は、クラスター解釈で協力者から語られた内容に鑑みて、調査者が命名した。

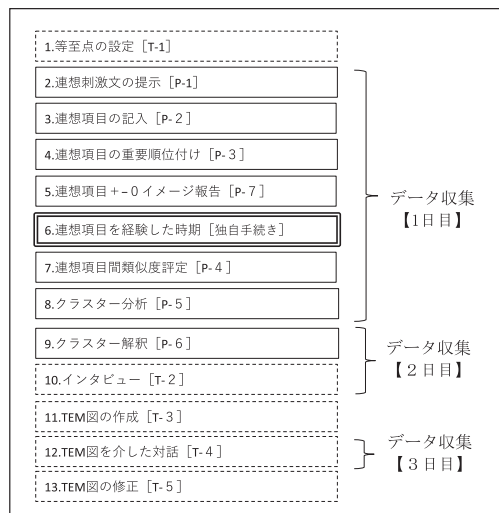


図4 データ収集日程

なお、協力者は高校生であることから、以降、協力者を「生徒」と記述する。

4.1 PAC 分析クラスターおよびクラスター解釈 にみる生徒の内面

クラスター 1 進路に対する前向きな気持ち

クラスター 1 の詳細を表 2 に示す。このクラスターは「夢」「期待」「地元から出たい」「夢を諦めたくない」「夢を叶える自信がある」「進路決定は学費の安さが第一」の 6 項目で構成されており、クラスター名を《進路に対する前向きな気持ち》と命名した。

クラスターを構成する 6 項目中 5 項目が「+」のイメージであり、このクラスターは進路に対する前向きな内容で構成されている。「+」のイメージとして挙げた「地元から出たい」に関しては、「地元を離れて生活することで自分が成長できる」、「ヘアメイク需要の多い関東にある専門学校で学ぶことは夢に近づくこと」と説明している。生徒は地元から出たいという志向を高校 1 年次からもっており、それには友人の影響がある。「問題解決姿勢をもち、自ら行動する友人」に対し「親に守られ、一人で行動できない自分」を感じ、この状況が「自分のためにならない」と語っている。関東志向には、関東に進学した親戚の影響、高校 2 年次に専門学校のオープンキャンパスで関東を訪れた際の印象が影響している。また、美容の道に進むという夢をもつ一方で、美容の道に進むことに対して親から賛同を得られないことに不安も感じている。その要因の 1 つを金銭的な問題であると考え、専門学校を選択する上で「学費の安さ」を優先しなければならないと考える一方で、「設備」や「カリキュラム」等を蔑ろにしたくないという考えももっている。美容という進路に対して親からの賛同が得られない状況の中で生徒を支え

ていたものの 1 つは「夢を叶える自信」である。そのエピソードとして、生徒は 2 つの内容を話している。1 つは中学、高校とテニス部のキャプテンをつとめ、その経験から得た「志をもって取り組めば結果にあらわれる」という信念、もう 1 つは高校 3 年の夏祭りで友人のヘアアレンジに取り組み、喜ばれた経験から得た自信である。最終的に美容の専門学校への進学が決まり、「夢を諦めなくてよかった」、「第一志望の学校ではないが進学できるだけでもありがたいこと」、「進学先はコンクールの強豪校であり、まあまあ満足している」と語っている。

クラスター 2 進路決定プロセスにおける悩み

クラスター 2 の詳細を表 3 に示す。クラスター 2 は「悩み」「親に進路を相談できない」「否定されるのが怖い」「もっと早く進路について親と話し合うべきだった」の 4 項目で構成されており、クラスター名を《進路決定プロセスにおける悩み》と命名した。

クラスターを構成する 4 項目中 3 項目が「-」のイメージであり、進路決定プロセスにおける生徒の“悩み”があらわれるとともに、インタビューの中で生徒は「クラスター 2 とクラスター 3 は“不安”という共通点がある」とも語っている。高校 3 年になり、周囲の生徒が進路の方向性を確定している中であって確定できない自分自身の状況に焦りを感じるとともに、その原因が「親に進路を相談できない」ためであると生徒は理解している。親への相談を躊躇した理由には「金銭面」と「美容系の進路への父親の否定的意識」を挙げている。親に進路を相談しづらくなったのは美容志望になった高校 3 年次からであり、1 年次、2 年次の「看護系専門学校が進路の選択肢に入っている頃は親に相談ができていた」と語っている。

生徒は「美容系の進路への父親の否定的意識」

表 2 クラスター 1 の詳細

クラスター 1 (連想項目)	記入順	重要順	時期	+ - 0 イメージ
夢	3	4	高2_冬	+
期待	4	5	高2_全	+
地元から出たい	7	10	高1_全	+
夢を諦めたくない	13	1	高3_夏	+
夢を叶える自信がある	14	2	高3_夏	+
進路決定は学費の安さが第一	16	15	高3_秋	0

表3 クラスター2の詳細

クラスター 2 (連想項目)	記入順	重要順	時期	+ - 0 イメージ
悩み	6	8	高2__春	-
親に進路を相談できない	8	11	高3__春	-
否定されるのが怖い	9	9	高3__春	-
もっと早く進路について親と話し合うべきだった	11	12	高3__冬	0

を感じつつも、「看護系の専門学校への進学が可能であれば美容系の専門学校への進学も可能だろう」と推測していた。しかし、高校3年次に看護の道を断念し、目標が美容の道一本になった時点で父親から「就職」するように言われ、親への不信感を抱いたエピソード(図5)を語っている。しかし、生徒は「父親が美容の進路に対して否定的なイメージをもっている」ことを母親から間接的に聴いているだけであり、父親の考えを直接聴いたことはなかった。進路決定後、生徒は「もっと早く進路について親と話し合うべきだった」と語っている。

クラスター 3 進路にかかわる不安

クラスター 3の詳細を表4に示す。クラスター 3は「お金」「親への迷惑」「不安」「担任の先生のアドバイス」「まわりへの相談が大事」「友人がみんな地元だと聞いて上京するのが不安になった」の6項目で構成されており、クラスター名を《進路にかかわる不安》と命名した。

このクラスターは金銭面を中心とした進路に関する生徒の不安と、「先生のアドバイス」「まわりへの相談」といった不安を軽減するもので構成されている。インタビューの中で生徒に「不安」に対する感情を問うと「“悲しい”半分、あとはどうにもできない“怒り”」と答えている。クラスター 2の生徒による解釈で「お金を払うのは親であり、自分にはどうしようもないこと」と語っていることから、「金銭面＝自分ではどうしようもないもの」という生徒の捉え方が推測できる。

すでに家計から兄の短大の学費が支払われている状況下で、さらに自分の学費を支払わせること

は「親への迷惑」と生徒は考えている。進路の最終決定が迫る中で信頼している進路指導担当教員へ相談に行き、進学は「今じゃなくてもできる」という助言を受けている。助言に納得する気持ちの一方で、「同じ学年の人たちと同じタイミングで進みたい」という思い、就職した場合は仕事を頑張らなければならない、「一度就職してから進学することは難しい」と感じている。高校3年の夏休み後、「就職進学ガイダンス希望調査票」を学校へ提出する段階で、母親から「進学は金銭的に難しい」ことを説明され“就職志望”として調査票を提出した。“進学志望”から“就職志望”への変更を受けて、担任から生徒自身の真意を問われ、進学したいという気持ちを表明している。親に進学を許可されるよう、生徒と担任とで作戦を練り、専門学校の所在地、経費、設備等で進学先として検討の余地がある数校の選択肢を準備して進路最終決定のための三者面談に臨んでいる。

4.2 本生徒の進路決定プロセス

本生徒の進路決定プロセスを図6、図7に示す。本生徒の進路決定プロセスが高校在学期間にとどまらず、幼少期に遡り、現在に至る様相を見ることができ、進路決定プロセスに描かれた本生徒の経験をより深く理解するための鍵になるのが、生徒が捉えた TEM 概念である。

「進路が達成された時点」を〈等至点〉と設定し、調査者の中では「専門学校の合格」を想定していた。しかし、生徒からは、最終的に受験した専門学校の「公募推薦の受験が父親から許可されたところ」との、調査者の想定とは異なる回答を得た。

高1とか高2の時は看護系の専門学校に行きたいって話してて、いいよって言われてて。美容って言った,..美容になって高校3年の時に。美容はお父さんが反対していた職業で、そこに行きたいってことを相談することも怖かったのに、いきなり就職しろって言われて。前はいいって言ってたのに、なんでいきなり、今になっていきなり変えろって言われたのか、なんか意味が分からないみたい。怖い？意味が理解できなくて。今までいいって言ってたのにいきなり言われて。ちゃんと考えてるのかなと思って、私のことを。

図5 親へ不信感を抱いた出来事についての生徒の語り

表4 クラスター3の詳細

クラスター3 (連想項目)	記入順	重要順	時期	＋－0イメージ
お金	1	3	高3_夏	－
親への迷惑	2	7	高3_夏	－
不安	5	6	高3_春	0
担任の先生のアドバイス	12	14	高3_夏	＋
まわりへの相談が大事	15	13	高3_冬	0
友人がみんな地元だと聞いて上京するのが不安になった	10	16	高3_冬	－

生徒が捉えた等至点を〈等至点1〉、調査者が設定した等至点を〈等至点2〉として図7にあらわした。

さらに、〈必須通過点〉を「ここを通らなければ進路が達成されなかったところ」、〈分岐点〉を「いくつかの選択肢があって悩んで選択したところ」、〈社会的方向づけ〉を「自分が向きたい方向へ進むことを妨げたもの」、〈社会的ガイド〉を「自分が向きたい方向へ後押ししてくれたもの」と説明し、生徒から聴き取っていった。

目指す進路に辿り着くまでの〈必須通過点〉として、高校2年次に参加した看護と美容の専門学校のオープンキャンパス、高校3年次に担任と作戦を練って臨んだ三者面談、中高を通して「志をもって取り組みれば結果につながる」という自信を得たテニス部のキャプテンとしての活動を挙げている。また、生徒は進路決定プロセスの終盤、父親から許可された学費の安い専門学校ではなく、少し学費は高いがコンクールで結果を残している学校への受験を自分から父親へ申し出ている。その専門学校のオープンキャンパスへの参加も必須通過点と捉えていた。

〈分岐点〉として、看護と美容の専門学校のオープンキャンパスに参加し、両者を天秤にかけ、「看護の道を断念したい」という意志を父親へ伝えた時点、最終的に受験する専門学校を選択した時点を挙げている。就職進学ガイダンス希望調査票に「就職希望」と書いて提出し、担任から真意を問われた時点は、「〈分岐点〉でもあり〈必須通過点〉でもある」と答えた。

〈分岐点〉には、実際には辿らなかったが、辿る可能性があった道を「可能な経路」として調査者が図にあらわした。選択しなかった経路について考えることは、選択した経路についてより深く考える視点となった。

〈社会的方向づけ〉として、兄の進学、父親の

美容に対する否定的意識の2つを挙げている。どちらも家族によるものであることが特徴的である。それに対して、〈社会的ガイド〉には、友人と担任からの協力という、学校における人間関係によるものを挙げている。「悩んでいるならまずやってみたら」という友人からの助言、その友人が周囲へ本生徒のヘアメイクの技術を口コミで広げてくれたことが、振り返ると美容の道への後押しとなる出来事であったと語っている。担任からのガイドについては、本生徒と担任とで作戦を練って臨んだ三者面談において「担任の先生が(美容の道を両親に) 激推ししてくれたこと」と生徒は語っている。また、オープンキャンパスで看護の現実を認識し、看護の道を諦めたことを「向かい風っぽくて追い風だった」と、その両義性を捉えて表現している。

インタビューの最後に、「進路が決まった今、明確になってきたことは何か」と尋ねた。生徒は、「美容の進路に関すること」と「親に関すること」を挙げている。美容の進路に関しては、苦しい時でも「自分のやりたいことのためなら頑張れる」という思いが明確になったこと、今後は美容の道で修行を積み、しっかりと技術を身につけたヘアメイクアップアーティストになりたいという将来像を語った。また、両親に関しては「自分のことをどうでもいいんじゃないかと思っていたけれど、(進路に関する) いろいろな過程を通過することで、ちゃんと考えてくれていると思うようになった」と話し、両親が生徒に対して「(地元)に帰って来たら(生徒に)髪を切ってもらおう」と話したというエピソードを語った。

5 考察

本生徒の進路決定プロセスの分析から、進路決定に影響を及ぼしたと思われる5つのストーリー

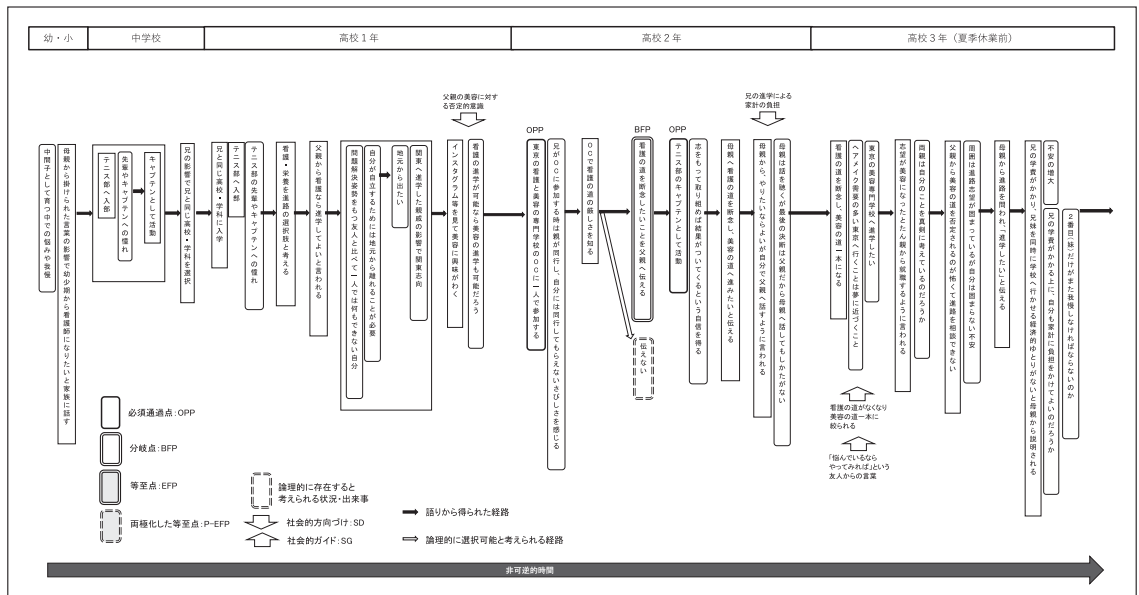


図6 本生徒の進路決定プロセス その1

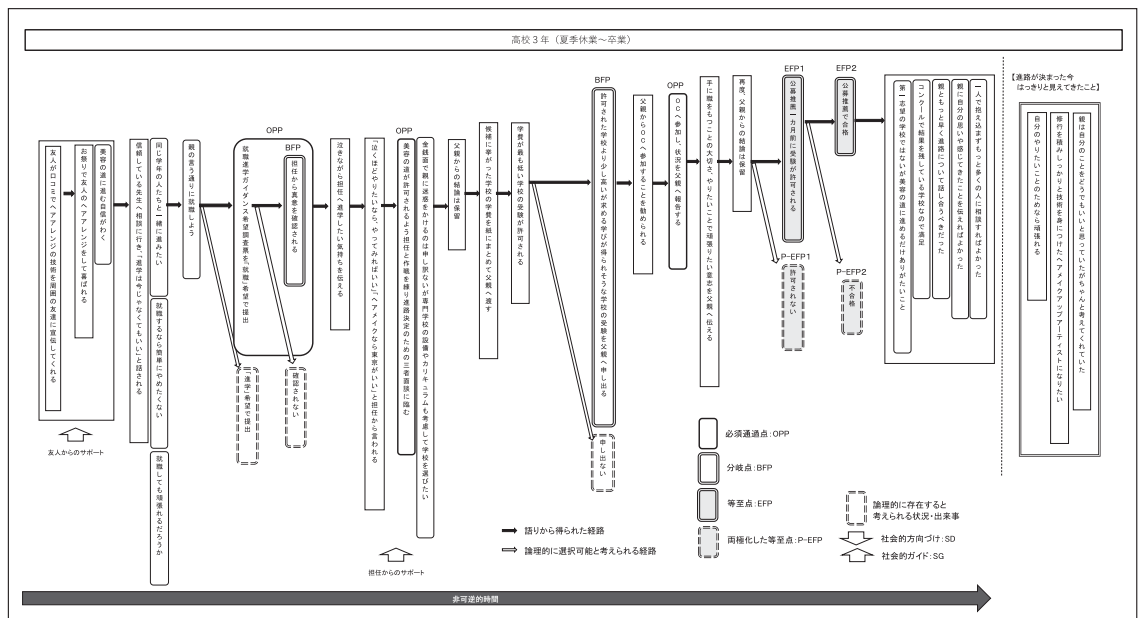


図7 本生徒の進路決定プロセス その2

ラインが浮かび上がってきた。

進路決定プロセスにおける、目指す道へ向かう生徒の姿勢の変容、葛藤や成長につながる他者とのかわり、自己形成へ向かう歩みを、「(1)目指す道に向かうためのステップ、(2)両親との関係における葛藤、(3)兄の存在と自己、(4)自己の成長への期待、(5)自信の形成」と命名し、以下、それぞ

れについての考察を行う。

5.1 進路決定プロセスにおけるストーリーライン

5.1.1 目指す道へ向かうためのステップ

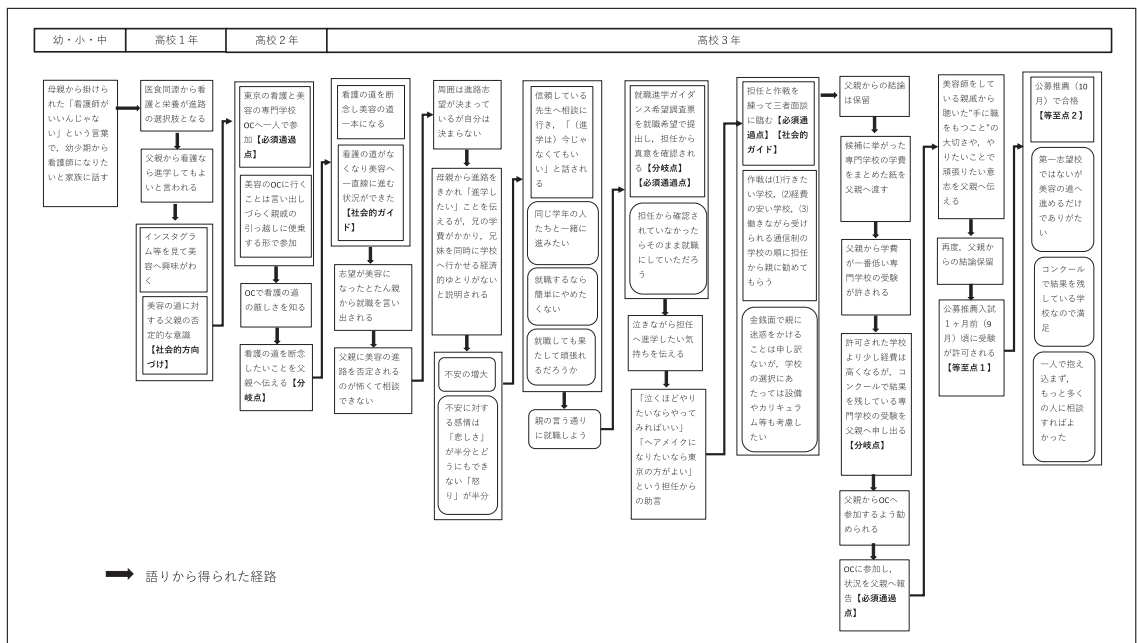
このストーリーラインの詳細を図8に示す。幼少期は「看護師になりたい」と家族に話し、高校では看護・栄養・美容が進路の選択肢となり、最

後に美容の道を選択していくまでのストーリーであり、本生徒の進路決定プロセスのメインストーリーームといえる。看護志望は、幼少期に掛けられた「母親の言葉」がきっかけであり、同時に「父親が進学を許可する道」であったことが生徒から語られている。一方で、生徒自身の看護への思いが感じられるエピソードは、終始、インタビューには登場しない。高校1年次にあらわれた「栄養」の志望に関しては、「看護」と「高校の家庭系学科での学び」の共通点を模索した感がある。主体的に情報収集し、行動を起こしているのは美容の道に関してのみであり、美容の進路が本生徒の本命の道だったといえる。

このストーリーラインには、美容の道へ進むために進路の「選択肢を手放していく」過程が描かれている。進路選択は「選び取っていくこと」である反面、選択肢を「手放していくこと」でもある。生徒は看護の専門学校のオープンキャンパスで「看護の厳しさ」を知り、それをきっかけとして看護の道を断念することになる。看護の道がなくなり、美容の道一本になったことについて生徒が「向かい風っぽくて追い風」と表現していることから、本生徒の進路決定プロセスにおいて「他の選択肢がなくなる」ことが重要な意味をもって

いたと考える。

また、「父親の美容への否定的意識」というハードルを越えるための試行錯誤の過程であったともいえる。三者面談以前は父親に否定されることを怖れ、美容への思いを父親へ伝えられない状況が続いていたが、ある時期を境に、経費面で無理のない範囲で最も生徒自身が求める学びを得られる美容の専門学校の受験を父親へ申し出たり、「手に職をもつ」ことに対する自身の考えを父親へ伝えたりと、生徒の行動が変化する。その変化のきっかけとなった出来事が、「担任と作戦を練って臨んだ三者面談」である。三者面談へ向かう前段階として、就職進学ガイダンス希望調査票の「就職志望」での提出がある。その時点で、担任が生徒へ「真意を問う」というステップがなければ「そのまま就職していた」と生徒が語っていることから、進路決定プロセスにおける重要な局面と捉えられる。将来を見据えた職業意識が芽生える前段階において、子供にとっての愛着対象である「親」の思いに応える職業を志望することは珍しいことではない。幼少期に掛けられた母親からの言葉をきっかけとした「親の思いに応える進路選択」から「自分自身の適性や将来を見据えた進路選択」へ、いつ、どのように移行するかということが本



生徒の進路決定プロセスの1つのテーマだったといえる。一旦は進学を諦めかけた生徒が、担任からの支援により、再度、目指す道へ進むきっかけを得たことで、生徒の進路へ向かう姿勢に変容をもたらした。「自分自身の適性や将来を見据えた進路」へと舵を切ることにつながったと考える。

生徒に「進路が達成されたと思った時点はどこか」を尋ねた際、最終的に受験した専門学校の「公募推薦の受験が父親から許可されたところ」と答えている。調査者は「進路が達成された時点」を「専門学校の合格」と想定していたことから、調査者の想定と異なる回答が生徒から得られたことになる。このことこそ、生徒の内面世界への接近であると考えられる。受験で合格を得ること以上に「受験を許可される」ことを高い壁と感じていた生徒の心情を調査者が知ることとなった。そのような意味において、この高いハードルを越えるための力を生徒に与えた担任からの支援の意味は大きい。

5.1.2 両親との関係における葛藤

このストーリーラインの詳細を図9に示す。高校生の進路決定プロセスにおいて、親からの影響は少なくない。インタビューの最後に「進路決定プロセスを通してはっきりと見えてきたことは何か」を尋ねた際の生徒の回答は3つあった。その1つが「親は自分のことをどうでもいいと思っていたが、そうではなかった」であり、本生徒の親へ寄せる思いの変容が感じられる。

幼児期から子供が何かに挑戦する際の心の原動力に「自分のことを応援してくれる存在としての親」がある。「看護の進学が可能であれば美容への進学も可能だろう」と考えていた生徒にとって、「美容の道一本になったとたん、父親から就職を言い出された」ことは衝撃をもたらした。「美容の道一本になったこと」と「就職を言い出されたこと」に関係があるかは直接父親に尋ねていないため真偽は不明である。しかし、少なくとも生徒がそのように捉えていたことは事実であり、「自分のことを真剣に考えているのか」という疑問を生徒が抱くことにつながった。父親の「美容への否定的意識」を〈社会的方向づけ〉と生徒が捉えていることから、本生徒の進路決定プロセスにおける父親の影響の大きさが理解できる。

母親は進路決定プロセスにおいて、「子供の話を聴く存在」であり「父親と子供の仲介者」という役割を担っているが、「最後の決断は父親」という態度を崩さなかった。母親は「子供の美容の道という選択を応援する」と担任との2者間では話している。担任には「応援する」と話しているが、子供には「応援する」という姿勢ではなく「最後の決断は父親」という一見すると突き放した感がある姿勢をとった母親の内面にも、何らかの意図または葛藤が発生していたと考えられる。

また、母親との関係について、生徒は幼少期に感じていた「さびしさ」を語っている。1歳違いの兄が幼少期にあまり身体が強くなかったことから、自分よりも兄の方に母親の注意が向き、弟が生まれると注意の対象が弟へと移った。そのため、「自分は母親に甘えることができなかった」と語った。進路決定プロセスにおいて生徒が感じた「自分のことを真剣に考えてくれているのだろうか」という思いに少なからず関係している可能性がある。幼少期からの親との関わりの中で「思い」がつくられ、高校卒業後の進路の選択においても、その「思い」が影響することが示唆された。

「進路決定プロセスを振り返った時、親からどのような支援が欲しかったか」を生徒に尋ねると、親が兄のオープンキャンパスには同行したが自分には同行しなかったエピソードを語り、「一緒に来て欲しかった」と話し、「私に、もっと興味をもって欲しかった」と続けて語った。本生徒にとって親は、最も自分を認めて欲しい存在であり、最も自分の進路を応援して欲しい存在であったと考える。

そのような存在である親は本生徒に、「父親が美容に否定的なのはなぜなのか」、「兄には進学が許されて自分には許されないのはなぜなのか」という疑問をもたらした。人生には答えの出せないことは多い。また、答えを出すことだけが最善の方法であるとも言いきれない。しかし、青年期の自己を形成する段階にある生徒にとって、これらの疑問に折り合いをつけることは、少なからず大切な通過点であったのではないかと推察する。

生徒は、自身の悩みへの対処姿勢について「一人で考える傾向」があると語っている。しかし、進路決定プロセスを振り返った際には、「親と、

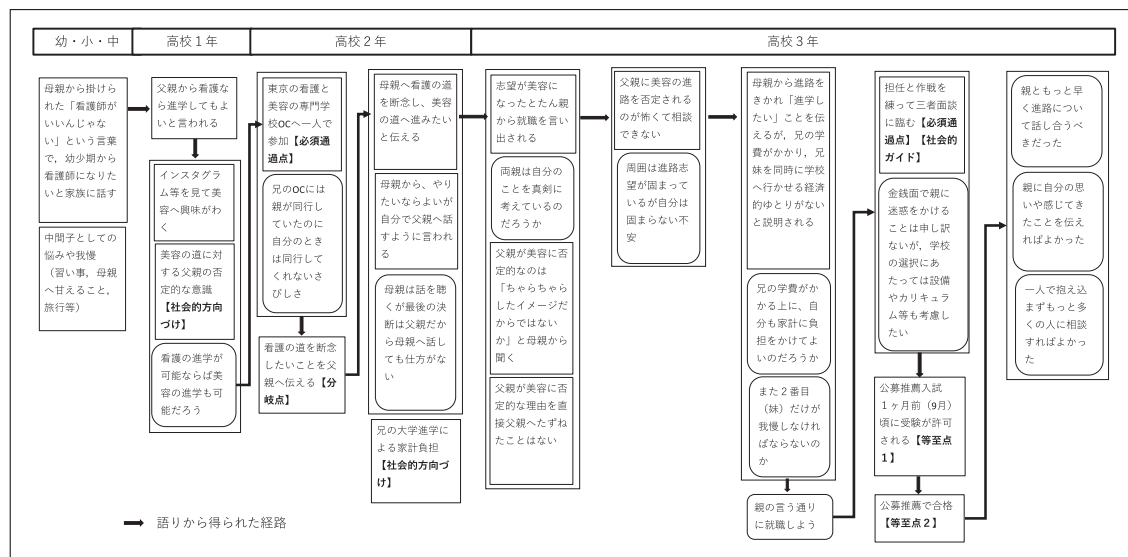


図9 両親との関係における葛藤

もっと早く話し合うべきだった」との思いに至っていることから「一人で考える」ことが最善の方法ではなかったと捉えていることが分かる。生徒は「一人で考える傾向」を自分自身の現状として違和感なく受けとめている様子であるが、もとを辿ると「一人で考える」に至った過程が存在する。つまり、進路決定プロセスにおいて最善ではない方法を選ばざるを得なかった遠因が生徒の生育過程に存在していたと考えることもできる。

5.1.3 兄の存在と自己

このストーリーラインの詳細を図10に示す。本生徒は、兄と弟がいる中間子の長女である。1歳年長の兄の影響について、本生徒は幼少期に遡って語っている。その内容の多くは兄の影響により生じた「我慢」に関するエピソードであった。兄の進学を〈社会的方向づけ〉と捉えていることから、本生徒が進路を決めるにあたり、兄の進学は逆風的な影響を及ぼした。母親から「兄の学費の支払いがあるために本生徒の学費を支払うことが難しいこと」を説明されたエピソードを語る際、「兄のせいではないが」と前置きしつつも「また2番目(妹)だけが我慢しなければならないのか」と、幼少期から「我慢」してきた思いが表出している。進路決定プロセスで「兄のオープンキャンパスには親が同行したが自分には同行してくれな

い」、「兄は進学できて自分は進学が難しいと言われる」、週れば「兄は幼少期に習い事をさせてもらえて自分はさせてもらえなかった」、「兄は母親に甘えられて自分は甘えられなかった」というエピソードを語り、「兄と私の違いは何か」という疑問に折り合いをつけることも本生徒の進路決定プロセスに葛藤をもたらしたと考える。

一般的には、「我慢」を重ねることにより「諦め」という姿勢につながることも多い。しかし、本生徒は自分の目指す進路へ進むことを諦めなかった。家計にゆとりがないなかで自分の夢を押し通すことは、見方によっては「自分本位」と捉えられることもある。角度を変えれば、本生徒の美容の道への「思いの強さ」と捉えることもできる。本生徒は希望した道に進むことで、図らずも夢に対する責任を自身で負う道を選択したといえる。

5.1.4 自己の成長への期待

このストーリーラインの詳細を図11に示す。本生徒は高校入学時から「地元を出たい」という意志をもっていた。その理由として、関東へ進学した親戚の影響と高校の友人の影響を挙げている。とりわけ、友人から受けた影響に関するエピソードは印象的である。疑問点はすぐに周囲の人へ尋ねるなどする友人を「問題解決姿勢がある」と表現している。それに対して自分自身のことを「一

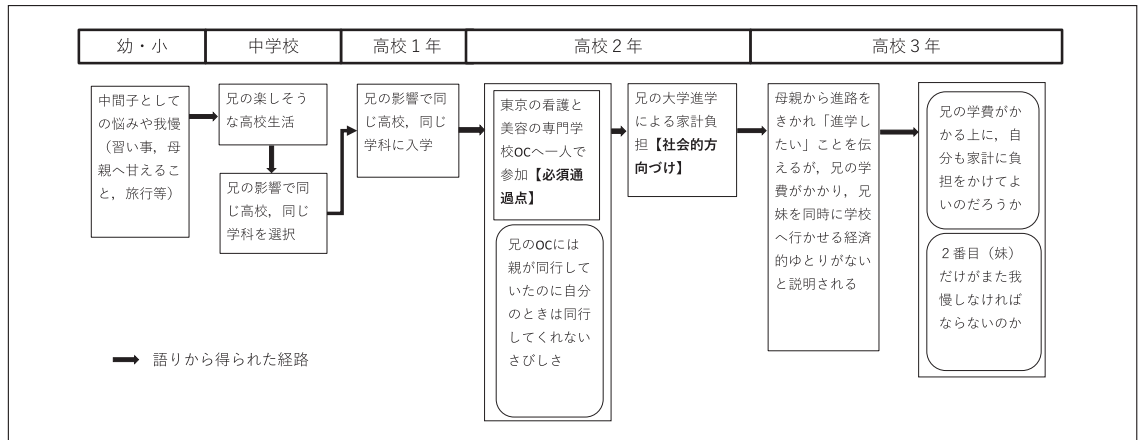


図10 兄の存在と自己

人では何もできない」と表現している。その一例として「高校生になるまで一人でバスに乗ったことがなかった」と語った。生徒が暮らす地方は、もとより自家用車の利用が多い。それに加えて、東日本大震災後、通学時の送迎を家族が自家用車で言う家庭も多くなった。通学の送迎だけを取りあげて「家族に守られている」と捉えているとは考えにくい。理由がどのようなものであっても、青年期に「地元を出たい」と願うことは自立に向かうステップとしては、いたって健全ではないかと考える。

高校2年次に東京の専門学校のオープンキャンパスに参加し、東京の専門学校へ行きたいという思いが強くなる。一方で、「親に学費を払わせてまで行くべきか」という迷いも生じる。そこで前

に進む推進力をもたらしなのが「悩んでいるならやってみれば」という友人の言葉である。この友人の言葉を〈社会的ガイド〉と捉えていることから、進路決定プロセスにおいて友人は本生徒の成長を促す重要な役割を担ったといえる。

5.1.5 自信の形成

このストーリーラインの詳細を図12に示す。データ収集の最初に行ったPAC分析で、重要項目の1位を「夢を諦めたくない」、2位を「夢を叶える自信がある」と回答していることから、美容の専門学校に進学することへの父親からの同意が得られない状況にあって、本生徒を支えたものが「夢」と「自信」であったと理解できる。生徒は「自信」の形成について、2つのエピソードを語って

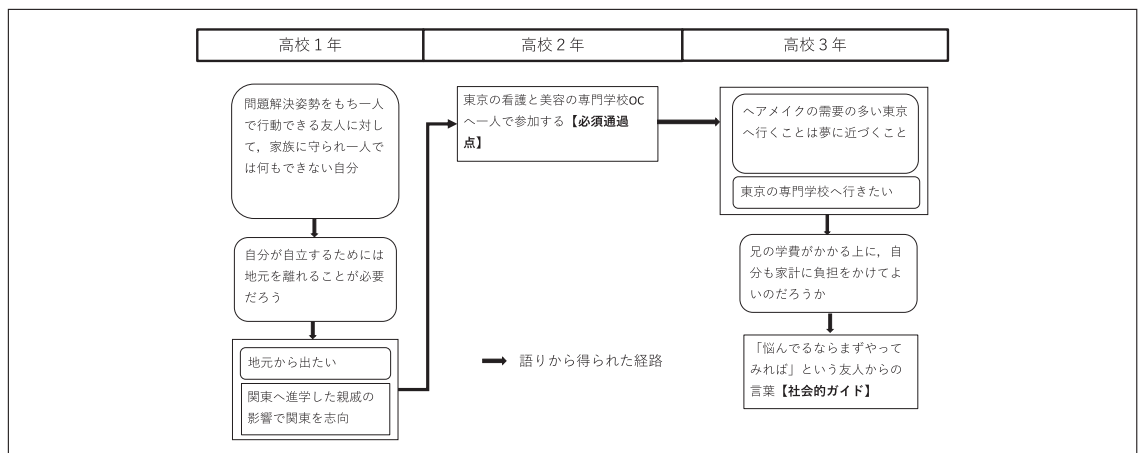


図11 自己の成長への期待

いる。

1つは、中学校・高校と所属したテニス部でキャプテンを任された経験である。兄の影響を色濃く受けてきた本生徒にとって中学校でのテニス部への入部は、自分自身でした「最初の選択」といえる。先輩たちの中でも、とりわけキャプテンの姿に憧れを抱き、その姿を目標に、熱心に活動に取り組んできた結果のキャプテン就任だった。その経験から、本生徒は、「志をもって取り組めば結果につながる」という手応えを獲得している。自分がした選択に対して得られた自信であったことが、より自信の質を高めたと考える。

もう1つは、同級生のヘアアレンジをして喜ばれた経験である。高校3年次の夏は、美容の道へ進みたいと思いながらもその思いを父親へ伝えることができず、就職という選択肢との間で不安が高まっている時期である。この頃に、夏祭りにいく同級生のヘアアレンジをすることになるのには、鍵になる友人の行動がある。友人が周囲の同級生へ「（本生徒が）ヘアアレンジが上手いからやってもらったら」と口コミで宣伝を行った。その結果、本生徒は数人の同級生のヘアアレンジをして喜ばれることになる。友人のおかげで得た機会であり、この友人の行動は本生徒の自信の形成に重要な役割を果たした。一方で、この友人が周囲へ口コミをするに至った背景も想像できる。このエピソードの中で生徒は、「それまでは自分以外のヘアメイクをしたことがなかったんですけど、自分の髪だけで練習してて」と語っている。本生徒がヘアメイクの練習をしていることを知っていたからこそできた友人の口コミだったこと、

友人がつくってくれた機会に応えられるだけの技術を本生徒が練習で培ってきたことが良い流れを生み出したともいえる。

前者は「夢を叶える自信」となり後者は「美容の道へ進む自信」となった。この2つの自信が、夢を諦めたくないという思いを支え、目指す道へ進む推進力になったと考える。

6 まとめ

本研究では、PAC 分析と TEA を併用し、不安や悩みを抱えながらも自分の志す道へ進もうとする高校生の進路決定プロセスを考察した。データの考察を通して、高校生が進路の選択肢を手放しながら道を見つけていく過程、その過程で生じる様々な葛藤、進路決定プロセスに影響を及ぼす重要な他者の存在が浮かび上がってきた。

美容の道を志望していた本生徒にとって、看護のオープンキャンパスに参加することは選択肢を「手放すためのステップ」だったといえる。「何かを得るための経験」だけでなく「何かを手放すための経験」が道を見つける上で必要不可欠である。高校生の進路決定プロセスにおいて、教員から「可能性を広げること」を助言することは多い。「選択肢を増やす」一方で、いかにその「選択肢を手放すか」ということも大事なプロセスとなることが本プロセスで示唆された。また、進路決定プロセスにおける様々な出来事は、〈社会的ガイド〉としての他者、〈社会的方向づけ〉としての他者との関係性の中で生まれ、他者の存在が状況を良好にも困難にもする。だからこそ、「一人で抱え込まず、もっと多くの人に相談するべきだった」

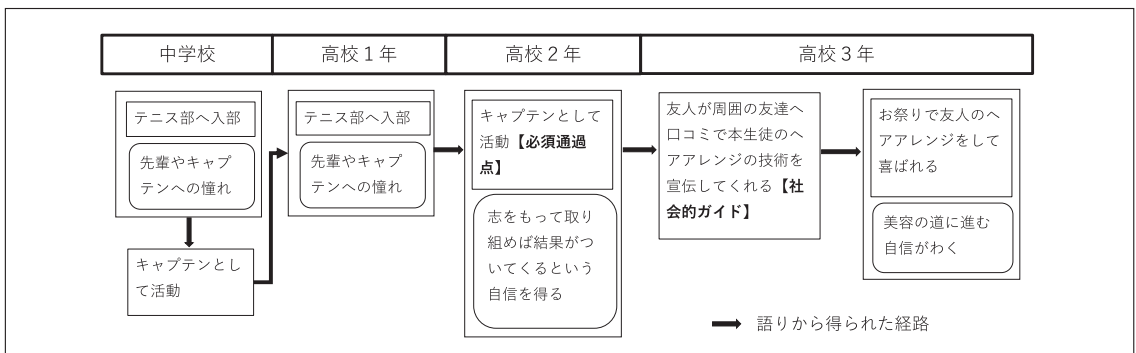


図12 自信の形成

「親もっと早く進路について話し合うべきだった」「思いや感情を伝えておけばよかった」という、一連のプロセスを振り返った生徒の語りが印象深い。背中を押してくれるものは他者の存在だけではない。過去の経験や積み重ねてきた自信が後の自分の背中を押すものになる。一方で、過去から続く思いが現在の葛藤をもたらすものにもなる。

「幼少期から兄との関係性の中で感じてきた我慢」や「生育過程で生じた“悩みを一人で抱え込む傾向”」は、一見すると進路決定プロセスと直接的には関係のないことかもしれない。しかし、本生徒が進路決定プロセスを語る上で必要な素材であったことは事実であり、生徒の中では「過去」のことではなく「現在につづくもの」であるといえるだろう。生徒にとって「事あるごとに蘇ってくる思い」であったのかもしれないし、進路決定プロセスの振り返りを通して気がついた「眠っていた思い」なのかもしれない。いずれにしても、生徒の中にある思いに生徒自身がアプローチし、語ること自体に意味があるのではないだろうか。それは、生徒が自分自身の思いに気づく機会であるとともに、生徒にとってどれほどの経験だったのかを他者が知る機会でもある。生徒の中の思いが抑圧されたものであれば尚更のこと、生徒の内面にある思いを他者と共有し、表出させていくことが、将来的に生徒自身の心身の健康を支える可能性もある。

本研究では、データ収集の最初の段階で PAC 分析の手法により個の内面から直観的に出現するイメージでアウトラインを掴み、インタビューにより時系列でのつながりを捉えることを試みた。それにより、進路決定プロセスを構成する複数のストーリーラインが生成され、時間の流れのなかで重なり合う生徒の体験を紐解くことができた。高校生の進路決定プロセスにおける悩みや葛藤の可視化は、青年期の理解につながる。一方で、進路決定プロセスを振り返り、自分自身のそれまでの経験を俯瞰した生徒が、今後の人生の中で生きるヒントを得られる可能性もある。また、PAC 分析の手続きである「連想刺激文の提示に対する協力者の連想」を内面探索の導入部に実施することが、無理なく、内面探索へ向かう「インタビュー

の入口」となる可能性も感じている。

本研究では、PAC 分析と TEA を組み合わせ、個の内面にアプローチすることを試みた。人の「生き方」と「語り」を扱うライフヒストリー研究、ライフサイクル研究、ライフストーリー研究等での活用を視野にいれながら、本手法によるデータ収集・分析を重ね、方法論的妥当性を得ていくことが今後の課題である。

最後に、本研究に取り組み、これまで自分自身が行ってきた「面談」からは得たことのない「高校生が捉えている世界、高校生が生きている時の流れに参加させてもらう」感覚が得られたことを特筆したい。

参考文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 復縁経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例, 立命館人間科学研究第25号実践報告, pp.95-107
- 今野博信 (2016) 高校生の PAC 分析実施例からの留意点の検討—学校と塾のイメージ差をテーマにして—, PAC 分析学会誌第1巻, pp.51-52
- サトウタツヤ (2013) 『質的心理学の展望』株式会社新曜社
- サトウタツヤ (2017) 『TEM では始める質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして』誠信書房
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン・ヴァルシナー (2006) 複線経路・等至性モデル—人生経路の多様性を描く質的心理学の新しい方法を目指して—, 質的心理学研究第5号, pp.255-275
- 程騁 (2017) 就職活動を軸とした留学生の日本語学習に対する意識構造—中国人民大学学院生を対象とした質的分析—, 東北大学大学院教育情報学教育部修士論文
- 内藤哲夫 (2017) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版]: 個を科学する新技法への招待』株式会社ナカニシヤ出版
- 安田裕子・サトウタツヤ (2017) 『TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する』誠信書房
- 安田裕子・サトウタツヤ (2019) 『TEM でわかる人生経路—質的研究の新展開』誠信書房

Qualitative Approach to High School Students' Career Decision Process — Co-interpreting Students' Subjective Experiences by Combining PAC Analysis and TEA —

Yumie MIZUKAMI*, Hideki KOZIMA*

* Graduate School of Education, Tohoku University

ABSTRACT

Combining PAC (Personal Attitude Construct) analysis and TEA (Trajectory Equifinality Approach) , we analyzed and interpreted the career decision process of a high school students. We approached the subject's experiential world by digging "vertical holes" (important elements/events for the subject's current situation, captured by PAC analysis) and connecting them into "horizontal tunnels" (causal connections of the elements/events, captured by TEA-based unstructured interviews) . As a result, we identified five storylines in the subject's career decision process. In addition, we learned the importance of the process by which high school students reach their goals by abandoning other possibilities, and the significance of the important people who influence the students' decision process.

Key words: High school student, Career decision process, PAC analysis, TEA, Generative interview